

平成 27 年度霞ヶ浦学講座 第 8 講 結果報告

実施日時：平成 27 年 11 月 6 日（金）10:00-15:30

テーマ：「霞ヶ浦漁業の歴史と現状」参加者数：24 名：

1. 場所：かすみがうら市郷土資料館、講師：かすみがうら市市民学芸員の皆さん

要旨：霞ヶ浦の漁業を代表する漁法は帆引網。これは明治 13 年に旧佐賀村の折本良平が発明したシラウオ対象の画期的な漁法で、その後柳沢徳太郎によってワカサギ漁用に改良された。100 年以上の歴史がある。帆引網によってたくさんの漁師が生計を立て、一大産業となっていた。これは大徳網に替わる漁法で、打瀬漁法の改良型だが、風を受けた帆で舟を横に動かすことが特徴だ。網は帆の反対側で引く。帆に受ける風の力と網を引く力のバランスがむずかしかった。帆引漁に使う舟はミヨシ舟で舳先に水切り（ミヨシ）がある。漁師は漁場まで、風上に向かって 1~2 時間、舳先で波を切って艫をこぐ。たいへんな重労働だった。乗り組む人数は 2~3 人で「とも乗り」と言った。霞ヶ浦は広く、風が強いので、長い距離で網を引くことができる。昼だけでなく夜も操業した。夜の帆引漁は、眠気との戦いだった。暗いので船どうしが衝突しかけることもあった。帆引船の帆柱は孟宗竹で、しなうことが重要だ。船体は杉材で作られた。木造船を作る船大工は、今はほとんどいない。帆は木綿だったが、今はナイロン製だ。帆引船は最盛期には 500 艘以上（一説には 900 艘とも）も操業していたが、昭和 40 年代にエンジン船のトロール漁に替わった。その大きな理由は、帆引漁は風まかせの不安定な操業だったが、トロール漁は大漁だったからだ。帆引漁は映画「米」に収録されている。現在は、観光用に 10 艘ほどが復活して、カメラマンや観光客に人気がある。霞ヶ浦の伝統漁法には、他に、刺網、張網、ささ浸し、せん（どう）、たかっぱ、うなぎかけなどがある。さらに当館では、伝統漁具の他に、民具、農具、かすみがうら市域の貝塚や古墳などからの貴重な出土品も展示してある。

2. 場所：茨城県水産試験場内水面支場

講師：荒井将人内水面資源部長、根本隆夫増養殖部長

茨城県水産試験場は農林水産部に所属し、ひたちなか市に本場と漁業無線局、行方市に内水面支場がある。内水面支場は内水面資源部と増養殖部に分かれ、西浦、北浦、涸沼等の湖沼や、那珂川、久慈川等の河川を対象にしている。内水面資源部ではワカサギ、テナガエビ、アユ等の資源調査やプランクトン等の環境調査を通して、霞ヶ浦など内水面の漁業資源を把握し、有効利用するための研究を行っている。外来魚対策も担当している。増養殖部は、ワカサギ、アユ、ヤマトシジミなどの増殖技術の開発に努める一方、コイヘルペスウイルス耐性のコイの研究を行っている。

霞ヶ浦の歴史は長いですが、江戸時代初期の利根川東遷事業の影響により、江戸、明治、大正、昭和初期まで洪水による水害が頻発した。戦後は、霞ヶ浦利根川水系の開発により水害はなくなったが、一時塩害が起きたことから、常陸川水門建設後、淡水化が加速された。現在は、上水、農水、工水として供給されている。

水産では、霞ヶ浦はもともと豊かな湖であり、漁業が盛んに行われている。漁獲量は、富栄養化が進んだ昭和 40 年代からワカサギ、シラウオに替わってエビやゴロ（ハゼ類）が増加し、逆水門が完全閉鎖した 4 年後の昭和 53 年にはピークに（17,487 トン）に達した。その後漁獲量は減少し、平成 23 年には最盛期

の10分の1程度となっているが、近年はワカサギの漁獲量の回復が見られている。霞ヶ浦では魚市場がないため、大半の漁獲物が漁業者から直接地元の加工業者や流通業者へ販売されている。また周辺地域では、水産加工業が盛んで、近年の加工水産額は35億円程度で推移していたが、福島原発事故の風評被害の影響により平成24年度は16億円程度となっている。コイの網いけす養殖は昭和36年に導入され、最盛期は年間の養殖量が約8000トンまで拡大した。しかし、平成15年にコイヘルペスウイルス病が発生し、法律によって湖内養殖の全量が処分された。その後、コイヘルペスウイルス病耐性のコイを育成することで、1100トンまで回復してきた。

霞ヶ浦を代表する魚種であるワカサギは、北海道、東北、日本海沿岸の汽水域に生息するが、全国の淡水湖沼にも移入され定着している。霞ヶ浦におけるワカサギの生活史では、早春に水深約1.0~1.5mの砂地の浅瀬に産卵し、孵化した稚魚は小型動物プランクトンを食べ成長し、その後大型動物プランクトン等を食べ、秋に成魚になる。霞ヶ浦のワカサギは基本的には1年で生涯を終える年魚である。カワエビと呼ばれるテナガエビは霞ヶ浦の重要な漁業資源であるが、その生活史では、5~11月にかけてが産卵期で、ゾエア幼生を経て着底して稚エビとなり、小型の生物や堆積物などを食べながら、成長、脱皮を繰り返して大きくなる。越冬して1年~1年半生きるものが多い。湖内の食物連鎖の中で、ワカサギは生食連鎖（動物が生きたままの植物を摂取することから始まる食物連鎖）を構成するが、テナガエビは、腐食連鎖（生食連鎖で排出された有機残滓（デトリタス）などをバクテリアなどが摂食・分解することで終わる食物連鎖）を構成しており、両者の漁獲量変動は湖内の生態系（食物連鎖）の変化に関係があると考えられている。ワカサギやテナガエビは霞ヶ浦の水産上、とても重要で、資源保護が大きな課題と考えている。それに影響する湖岸地形、産卵環境、アメリカナマズなど捕食魚にも対応しなければならない。水産上重要な魚種を増やすため、人工孵化・放流、水生植物帯造成、エビ魚礁設置、外来魚駆除の諸対策に加えて、漁獲規制、漁獲期間の設定、漁獲禁止区域や保護水面の設定など資源管理の取り組みが行われている。

支場内の試験池では、現在はホンモロコシの養殖試験を行っている。ハウス内の試験池では、県内河川への種苗供給のための霞ヶ浦産アユの親魚育成と人工採卵、ヤマトシジミの淡水での種苗生産試験などを行っている。ヤマトシジミは産卵・幼生期には塩分が必要だが、着生後は霞ヶ浦の淡水でも生育可能なため、湖水の浄化機能もあることから期待されている。ハウス内の加温水槽では、コイヘルペスウイルス耐性のコイの作出試験、エサの試験研究をしている。支場そばの湖内の試験用網いけすでは、湖水でのコイの飼育試験、エサの試験研究、ヤマトシジミの成貝までの飼育研究を行っている。付属のドックには調査船が係留され、資源調査や湖沼環境調査に使用されている。